

氏名(国籍)	ロワン バルバラ (スロベニア)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博甲第3520号		
学位授与年月日	平成16年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	文芸・言語研究科		
学位論文題目	二言語辞書における等価性の連続性について -コーパス・アプローチの立場から-		
主査	筑波大学教授	Ph. D.	カイザー シュテファン
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	坪井美樹
副査	筑波大学教授		高田誠
副査	筑波大学助教授		杉本武
副査	筑波大学助教授	博士(ドイツ文学)	伊藤眞

論文の内容の要旨

二言語辞書においては、見出し語に一方の言語(起点言語)の語または語句のリストが挙げられ、それに対してもう一方の言語(目標言語)で等価関係にある語あるいは語句が与えられる。すなわち、二つの言語の語が比較され、等価と見なされる語が、辞書の同じ見出し項目のもとに記載されるということになる。このことから、二言語辞書の目的は二つの言語の語と語との間に等価性を確立するということの意味する。

このように二言語辞書において中心的なテーマとなるのは、等価性の問題である。本研究は、二言語間の等価性について論議し、両者のあいだには等価性の非常に高いものから、ほんの一部の等価性しか見られないもの、さらには、等価性のないものまでといった「連続性」が見られることを明らかにすることを目的としたものである。また、それを実証するための根拠として、大量言語資料である「コーパス」を用い、いわゆるコーパス言語学による対照研究の方法論を確立することも目的としている。

「等価性」という概念は二つかそれ以上のものの中にイコールの関係があるということを示すものである。例えば、「 $2 + 3 = 5$ 」の場合、イコールの記号「 $=$ 」の左側にある価値がその記号の右側にある価値と同じであるということである。しかし、二言語辞書においては、起点言語の見出し語と目標言語の等価語との関係は1対1になっていない場合が多い。つまり、異なった言語に属する二つの語そのものを、直接比較するのではなく、起点言語の語が指すことがらと目標言語の語が指すことがらとが同等と見なされるならば、等価性が見られるということである。しかし、語そのものに等価性があっても、語を言語のネットワークの中で考えるならば、等価と見なされる語も異なった語彙体系や文法組織に関わる全体的な等価性の関係は必ずしも認められない場合があり、言語学における「等価性」の捉え方についてより精密な議論が必要となる。「等価性」が存在するという考え方が一方、「等価性」という用語自体のステータスを疑っている研究者もいるが、本論文の主眼は、等価性の有無について議論を行うことよりも、等価性には連続性が存在するという仮説を立てることであり、その連続性の存在についての妥当性を確認することにある。

具体的にはスロベニア語を起点言語に、日本語を目標言語に設定し、そこにどのように等価性が認められるのかを検討している。気象情報の場面コーパス、レファレンス・コーパス、一言語辞書といった資料に基

づいて、スロベニア語の14個の語とそれらと日本語で等価関係にある語について分析を行い、気象情報の場面コーパスのレベルと一般言語のレベルにおいて等価性の度合いがどのように異なるかを論じている。その結果、等価性には連続性があり、場面コーパスにおいて等価性の連続性が完全な等価性から、部分的な等価性の度合いを経て、等価性の欠如まで広がっていることを実証している。一方、一般言語において完全な等価性という度合いは見られなかったが、部分的な等価性と等価性の欠如を確認しつつ、等価性の連続性を四つのグループに分け、その間の境界は相対的であるということを強調している。つまり、等価性が高い語と部分的な等価性を持つ語の区別、部分的な等価性の二つのグループの区別、そして、部分的な等価性と等価性が欠如するグループとの区別は相対的なものであると主張している。

引き続き、以上の分析をもとに、言語学における「等価性」は絶対的な範疇ではなく、相対的なカテゴリーであるということ意識する必要があるとし、等価性を連続性として捉えることには二つの意義があると主張している。第一は、起点言語の語と目標言語の語との関係の位置を知ること、より適切な等価語を選ぶことができるという点である。本研究において、等価関係をスロベニア語の立場から見ると、日本語の立場から見ると、見えるところが変わってくるということが明らかになった。その例外は完全な等価性のパターンだけである。したがって、起点言語の語とその語の目標言語での等価語との重複部分と相違部分を明確にすることによって、より適切な等価語を選ぶことができるということになる。第二の意義は、対象とする言語ペアの語彙が、等価性の連続性においてどのような形で分散しているかということが分かれば、等価語の選択の仕方やラベルの付け方などについて判断がしやすくなるという点である。

本論文は9章からなっている。序章に続いて第2章では、等価性の概念とそれに関連する幾つかの問題について検討し、基本的な概念を確認している。まず、二言語辞書における基本的な単位を取り上げ、つづいて、辞書と内的辞書との関係について述べ、さらに、体系としての言語と発話としての言語について考察を行っている。そして、最後に語の意味と語の使用に言及している。

第3章と第4章では等価性についての先行研究を概観しつつ、本研究における理論的な枠組みを設定している。まず二言語辞書における方向性について論じ、起点言語の語の立場に立って、等価関係を考えているのか、あるいは、目標言語の立場に立ってその関係を見ているのかによって見えることが異なってくる、また、見ている者の母語が起点言語であるか、目標言語であるかということも比較の結果に影響を及ぼすという2点をとりあげ、この2点によって、使用者がある辞書を主に起点言語の理解のために使うのか、あるいは目標言語の表現のために使うのかということが決定されると論じている。これらの論点によって、一方の辞書と双方向の辞書という二つの辞書のタイプが抽出され、一方方向性の考え方の場合、一つの言語ペアには四つのタイプの辞書が必要であるとされる一方、双方向性の考え方の場合、二つの辞書でも足りるとされるとし、本研究においては、一方方向性の立場にたって論じている。次に、言語には完全に一致した対応関係がないという、いわゆる *anisomorphism* についての考え方を導入し、語レベルにおいて、起点言語の語と目標言語の語との間の等価関係がどのような段階で設定することができるのか、また、どのような形で確認可能なのかについて論じている。さらに、テキストレベルと語レベルにおける等価性についてどのように考えるかを論じ、現在、辞書学において論議されているプロトタイプ理論とフレーム意味論に基づく主張も行っている。引き続き第4章では等価性には連続性が存在するという前提とし、等価性の度合いについて論じた。先行研究を踏まえつつ等価性の度合いが高い語、部分的な等価性を持つ語、等価性が欠如する語という三つのタイプについて論じている。

第5章では、対照的テキスト分析、および、コーパス・アプローチについて論じ、コーパス言語学において基本的な概念である代表性について検討した上で、コーパス・アプローチが辞書学の研究においてどのような役割を果たしているかということについて考察を行い、両方の分析方法を踏まえつつ、具体的な等価性の連続性について分析を進める方法論について論じている。

第6章では、気象情報の場面コーパス、レファレンス・コーパス、一言語辞書を資料とし、スロベニア語の14個の語とそれらに対し等価関係にある日本語について分析を行い、分析した語の意味の重複及び相違について検討を加えている。

第7章では、まず起点言語の語と目標言語における語の中心的な意味と周辺的な意味がどのように区別されるかということ、および、典型性について検討した上で、分析した語に見られる等価性パターンとそれに関わる要素について論じている。等価性の連続性の度合いを四つのグループに分け、分析対象になっている語の等価関係を分類した上で等価パターンを抽出し、分析した例に見られた語レベルにおける言語間の相違について論じている。つづいて、資料として使った場面コーパス、レファレンス・コーパスおよび一言語辞書の有用性について考察し、総合的に見てこれら三つの資料を利用することが最も効果的であるということ論証している。

第8章では、本研究の成果としての等価性の連続性についての分析の結果が、実際の二言語辞書の項目の作成においてどのように関わっていくことができるかについて論じ、応用言語学研究としての本研究の成果の今後の発展について見通しが述べられている。

審査の結果の要旨

本研究は、辞書学という枠組みの中で、二言語辞書のもつ問題を「等価性」という側面から捉え、起点言語と目標言語の語彙項目間にはさまざまなレベルの等価性が見られ、そこには一定の連続性が認められることを論証したもので、この研究成果は、これから先二言語辞書を作成するための重要な学問的基礎を提供するものと考えられ、本研究の応用言語学としての貢献は大いなるものがあると評価される。

また、方法論として、コーパス・アプローチという手法を提唱しており、個別の語彙意味論的分析ではなく、大量のコーパス資料を駆使することにより個々の語の意味範囲を実証的に確定するという、新しい研究の方向を示している点も高く評価できる。本論文では、スロベニア語と日本語という組み合わせで論じられたが、ここで提唱された方法論は、どのような言語のあいだにも成立する汎用性の高いものであり、この点においても高く評価できる。

ただ、本論文では、スロベニア語を起点言語におく一方向の分析に終わっている点が惜しまれる。日本語からスロベニア語を目標言語においた視点が同時に望まれるところである。しかし、これはひとえに、日本語に利用可能なコーパスがないことに原因があり、筆者の論理・力量の問題ではなく、本論文の価値を損なう点ではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。